

久米島総合調査にあたって

上江洲 均

位置： 久米島は那覇市の西方98キロメートルの東支那海に浮かぶ周囲53.31キロメートル、面積55.69平方キロメートルの島である。周囲は珊瑚礁が発達し、東方に長さ11キロメートルのウガン崎が伸び、また、西のハンニ崎からは阿良岳に向けて堡礁があり、礁湖は古くから天然の良港となっている。

島は第3期火山帯に属し、北西部には、標高310メートルの宇江城岳を主峰とする山なみがあり、古くは西岳とも呼ばれた。対する東岳は287メートルの阿良岳である。

海上から遠望する久米島は双子山の観を呈する。かつて、中国人が亀の姿に見立てたことは故なしとしない。『随書』流求国伝で「龜^{くへき}」を久米島とする伊波普猷説はこのことを指している。それは、おもろ詩人が「ふたまた」と呼んだことから想像できる。中国との往来では、琉球の玄関口の島であったのである。

島の行政： 島の東に仲里村、西に具志川村がある。古くから「久米の二間切」と呼ばれたように、二つの間切からなる。仲里の名称は、古くは中城間切といたが、王子領との関係で使用制限を受け、現在の名称になったといわれている。仲里間切の蔵元は真謝に、具志川間切の蔵元は兼城にそれぞれあったが、いずれも大正時代に比嘉と仲泊に移転して現在に至っている。現在仲里村に17集落、人口5,283人、具志川村に14集落、人口4,555人が生活する（平成7年3月現在）。

歴史： 久米島にいつごろから人が住んだか。西北部の下地原洞穴からは、鹿化石と共におよそ1万8000年前の幼児骨化石が発見されている。貝塚時代は3,500年前の大原貝塚をはじめとして、清水、北原などの貝塚や遺跡が、主として島の西部の砂丘地帯に形成されている。これらの貝塚からは、中国の五珠銭などの古銭が出土するところから、しばしば航海者の来訪を受けていたことが想像できる。

久米島が日本の史書に登場するのは、『続日本紀』の元明天皇の和銅7年（714）の記事である。すなわち太朝臣遠建治等が、奄美・信覚・球美^{くみ}等人52人を率いて南島から至った、というものである。球美は久米島のことでありとされている。

久米島がクミと呼ばれ、「米」のイメージと結びついたのはかなり古いと思われる。史書を見ると、『李朝実録』（1462年）に「仇弥島」、『海東諸国記』（1471年）に「九米島」、『陳侃史録』（1534年）に「古米島」、『夏子陽使録』（1606年）に「粘米山」、『張学礼使録』（1663年）に「弧米」、徐保光の『中山伝信録』（1720年）に「姑米山」となっている。また、『お

もろさうし』に「久米」「くめのしま」とあり、内外ともに一貫して「クミ」または「クメ」と呼んでいたことが分かる。

稲作： 近世の久米島の石高は『琉球国高究帳』によると、仲里間切1,931石（田1,581石、畑349石）、具志川間切1,746石（田1,262石、畑483石）であった。水田の石高の比率は大きく、仲里側で4.5倍、具志川側で2.6倍もあった。そのころまでには山地の各所に、湧水をたよって水田が開かれていた。

特筆すべきことは、当時の為政者が、水利事業に心を砕いたことである。両間切とも17世紀初めには、遠くの川から水を引くための工事を行っている。1609年、具志川間切の西銘新溝は5,220間（9,396メートル）の用水を引いている。それを最長として1608年には仲地溝2,170間、1611年に太田大溝2,220間、1613年、兼城大溝3,240間、1615年、上江洲溝2,170間などはその一例である。溝を引く事業は溜池の建設へと進む。およそ20ヶ所ほどの溜池は、18～19世紀にその多くが建設されたもので、現在もそれを補強して利用している。これらの水利事業により、久米島の水田面積は一段と拡大した。

稲作については、良種の稲を発見して普及させた『遺老説伝』記載の儀間村の戸留長武とるながたきの記事のように、栽培についても努力が払われている。比屋定に太陽石というのがあり、比屋定の住人が、そこで太陽観測をしたという。その真偽は別としても、稲作についての気象の研究は、特に意を尽くしたようである。稲の播種日の「種子取」について、島の地形や土質・風向などから、4～5通りの播種日が実施されていた。

干拓と集落移動： もう一つの大事業は、湿地の干拓である。17世紀に始まり18世紀に大半が完了し、山地の集落が平地へ下っている。現在の仲里村真謝・宇根・及び泊・謝名堂じやなどうから比嘉・銭田・真我里せんだ まがりに至る平野部であり、南に面した儀間と具志川村の嘉手苅もそうである。18世紀ごろから集落が移動開始し、完了するのは20世紀に入ってからである。

稲の祭り： 5・6月の稲穂祭・稲大祭は、近年まで行われている。久米島には君南風チンペーアムシレラを最高神職として、その下に10人のノロがいた。かつて6月21日は、すべてのノロが君南風殿内に召集され、君真物神の神迎えが行なわれた。隔年で宇江城・具志川両城跡詣でも行なわれている。君南風といえば、1500年、八重山のオヤケ・アカハチの乱に首里軍に従い、呪咀合戦により首里軍を勝利に導いた話は有名である。

グスク時代： 話は前後するが、久米島が慶良間・伊平屋と共に中山に入貢したのは、英祖王5年（1264）である。すでに支配者がいたことを窺わせる。しかし、伝承によるグスクの築城は、14～5世紀といわれている。マダフツ按司が築城した具志川城であるが、次の真金声按司いしきなはの時代に本島系の伊敷索按司一族に追放される。しかし、伊敷索一族も『球陽』によると、1506年の首里軍の討伐を受けて亡びる。これについて『球陽』の編者は「久米島は古い時代から中山の領地であり、今更討伐は考えられない。按司が善政を布かず、

また謀叛の心があり、貢納を怠ったのではないかと推測している。租税の未納もさることながら、尚真王の中央集権に従わず、しかも私貿易により利益をあげていたのではないかと想像する。

具志川の城に、中国や大和の文物が入った様子、および久米のこいしの、しのくりやなどの神女が、真鉄^{まがね}や玉類を求めて大和旅をしたことが「おもろ」には謡われている。

久米島紬： 17世紀に坂元宗味と友寄景友が相次いで渡島し、桑の栽培から養蚕、真綿の作り方、紬の染め方や織り方などを指導し、貢納布に仕立てあげた。以来、米の6割以上を代納しているが、貧農の女正頭ほど重い負担を負わされたという不平等の歴史も内包する。明治36年になり旧慣による織物税が撤廃され、その呪縛から解放されるが、逆に技術的に低下する時期があり、明治の末ごろ紬織物を指導する女子工業徒弟学校が創設された。これにより、島の新しい特産品として脚光を浴びようになる。しかし大正12年に最盛期を迎えたものの、世界恐慌のあおりを受けて減少し、戦時中は一時途絶えることになる。戦後になって、ようやく復活し、県の無形文化財（工芸技術）に指定されて現在に至っている。

入植： 久米島は本島中南部に比べて農地が広いことから、廃藩置県後無禄になった首里那覇の士族の一団が、明治18年に渡島し、開墾を始めたのが具志川村西部の大原・北原である。カイクンという俗称はそのことを物語る。仲里村でも銭田・真我里に那覇から移住があり、真泊^{まどまり}・両奥^{おう}武島には糸満や渡名喜島などから漁業従事者が移住し、それぞれ新しい村落を作った

開墾入植とは違う事例が、具志川村の鳥島である。元は奄美の徳之島の西に浮かぶ硫黄鳥島の住民であり、旧王国時代、島において硫黄採掘で生計を立てた人々である。それが明治36年、火山の爆発を契機として、農地に余裕のある久米島に移住したのである。同じ琉球文化圏にある島であるが、言語や風俗の違いが見られる。

今後の展望： 従来稲作一辺倒であった農業は、とくに戦後換金作物を求めて、徐々に砂糖きび作になる。さらに1963年の大旱魃が追い打ちをかける形で、稲作の島を砂糖きびの島に変えていった。

また、国の補助による農業基盤整備事業の推進により、耕地が拡大し生産が増大した。一方、豊かな自然は、県立自然公園に指定された。しかし、その後も農業開発が進み、山の樹木の減少と赤土流失による自然破壊も進みつつある。景観の消失ばかりでなく、小動物の絶滅にもつながりかねない、いと危惧するむきもある。

明るい話題としては、両村立の博物館の建設が実現に向けて始動していることである。今後は、自然との調和の下で、新たな文化の創造を心掛ける努力が望まれる。